志雲会東京第一回勉強会
テーマ：「古事記　大国主命の国譲り」　要約（その４）

松田　武

## ６．天照大御神の天の岩屋戸隠れ

### （１）真っ暗になった高天原と葦原中國

『故於是、天照大御神見畏、開天石屋戸而、刺許母理坐也。』

速須佐男命の度を過ぎた乱暴狼藉に我慢出来なくなり、天照大御神は天の岩屋戸を開いて籠もってしまわれます。

『爾高天原皆暗、葦原中國悉闇、因此而常夜往。』

その結果、高天原は皆暗く、葦原中國の悉く闇になってしまい、夜ばかりで昼のない状態になります。

『於是萬神之聲者、狹蠅那須滿、萬妖悉發。』

そのため、よろずの神の声がさばえなす満ち、よろずの妖（わざわい）が悉く起こりました。

さばえ＝五月蠅　（旧暦の５月ごろ、群がって騒ぐ蠅）

なるほど、闇（やみ）は病み（やみ）に通ずるのですね。

### （２）思金神（おもいかねのかみ）の解決策

天照大御神の岩屋戸隠れという非常事態にどう対応するか。神々は天照大御神と速須佐男命が誓約（うけひ）を行った天安之河原（あめのやすがわはら）に多くの神々が集まって高御產巣日神のお子さんである、思金神に考えさせます。そこで出たアイデアは、

① 長鳴き鳥を鳴かせ
② 矛を作らせ
③ 八尺勾璁（やさかのまがたま）を貫き通した長い玉の緒を作らせ
④ 占いをさせて、どういう神具を作るか確かめさせた。その結果、天の香山（かぐやま）から青々と葉の茂った五百箇真榊賢木（いつほまさかき）を根から掘り起こして、勾

玉などで飾り付け、八尺鏡（やたのかかがみ）を取り付け

⑤ 天手力男神（あめのたじからおのかみ）を岩屋戸の脇に潜ませた

こうした準備をした上で、

『天宇受賣命、手次繫天香山之天之日影而、爲縵天之眞拆而、手草結天香山之小竹葉而、於天之石屋戸伏汙氣蹈登杼呂許志、爲神懸而、掛出胸乳、裳緒忍垂於番登也。爾高天原動而、八百萬神共**咲**』。

⑥ 天宇受賣命（あめのうづめのみこと）を伏せた桶の上で足拍子面白く躍らせた。踊り狂う天宇受賣命は神懸かりとなり、胸乳をかき出し、腰に結んだ裳紐を下腹あたりまで押し下げる勢いであった。

⑦ この天宇受賣命の踊りの面白さにより、集まった高天原の神々は声を合わせてわらった。古事記ではこの神々の大笑いの「わらう」に「咲」という漢字が使われております。

天宇受賣命の踊る様子

暗闇の中の、この大騒ぎにより岩屋戸より天照大御神の引き出しに成功するわけですが、そのアイデアを提供したのが、別天つ神の一柱、高御產巢日神（たかみむすびのかみ）の子、思金神であります。高御產巢日神はあめつちのはじめのとき、最初に出現された天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）の次に出現された神であります。その次に出現された神は　神產巢日神（かみむすびのかみ）であります。

タカミムスヒ　の　タカ　は　高い　逞しい　に通じ　陽神であり、
カミムスヒ　　の　カミ　は　下身　下部　　に通じ　陰神であります。

（３）天照大御神の天岩屋戸からのご帰還

天照大御神が潜んでいる天岩屋戸の前がたいへん賑やかなので、天照大御神はいぶかります。

『於是天照大御神、以爲怪、細開天石屋戸而、內告者「因吾隱坐而、以爲天原自闇亦葦原中國皆闇矣、何由以、天宇受賣者爲樂、亦八百萬神諸咲。」』

天照大御神は怪しいと思って、天の石屋戸を細めに開けて、内側からおっしゃいます。「吾が籠もっているので、天原（あまはら）も、葦原の中つ国もまっ暗闇だと思っていたが、何故、天宇受賣（あめのうずめ）は樂（あそび）をして、八百萬神は咲うのだ」と。そこで、すかさず、

『爾天宇受賣白言「益汝命而貴神坐。故、歡喜咲樂。」如此言之間、天兒屋命・』布刀玉命、指出其鏡』

天宇受賣は踊りを止めて、「あなた様より貴い神様がここにいらっしゃいます。なので、皆喜んで、笑ったり、踊ったりしているのです」。そう答えている間に、天兒屋命（あめのこやねのみこと）と布刀玉命（ふとたまのみこと）は、鏡を差し出し、天照大御神に見せました。

『天照大御神逾思奇而、稍自戸出而臨坐之時、其所隱立之天手力男神、取其御手引出』

天照大御神はいよいよ不思議なことだと考えて、少し岩屋戸を出て様子を見ようとなさいました。それをすかさず、隠れていた天手力男神は、天照大御神の御手を取って、天照大神を岩屋戸より引き出された。そのあと、布刀玉命は尻久米繩（しりくめなわ）を岩屋戸は付けて、「もうここにはお還りにならないで下さい」と天照大御神にお願いされました。

俗説では、天手力男神は天の岩屋戸をふさいでいる岩をその怪力で押し開けたとも言われますが、天手力男神は天照大御神の手を取って引き出した、と古事記には書かれており

ます。天の岩屋戸は天照大御神の念力と言うか神力がかかった岩で塞がれているので、天手力男神の力ではとても動かすことが出来い、と考えられます。

天照大御神を天の岩屋戸から引き出すのに、神々の大笑いと鏡を見せるという２段構えの“いぶからせ”戦法が用いられております。

① 天の岩屋戸の前で神々が集まり、大集会を行い、笑いさざめきます。
② 天照大御神は外の騒ぎを訝って、岩屋戸を細めに開けて外の様子を伺い、何故騒いでいるのか、と外に向かって問いかけます。
③ それに対し、天宇受賣がここにあなたより貴い神が来てくれたからです、と答えます。
④ そのチャンスを逃さず、用意していた鏡をその岩屋戸の隙間の前に差し出します。
⑤ その鏡に映った天照大御神ご自身のお顔を見て、天照大御神は「本当だ」と思ってしまいます。
⑥ 「私より貴い神様って誰かしら」とさらに岩屋戸を開きます。
⑦ そして、天照大御神は外に引き出されてしまいます。

天の岩戸の物語を描いた絵巻

この一連の流れを読むと、天照大御神は鏡に映った自分のお顔を見て、別の貴い神様だとお考えになります。天照大御神とはとても素直でおおらかなご性格なのだ、と筆者など大変感動したものでした。

ところが、鏡に映った自分のお顔を見て「私より貴い神様って誰かしら」と身を乗り出すのはいうのは、女の嫉妬心によるものだ、という説を唱える中年夫人がいらっしゃいました。

男である筆者は「えっ、そんな考えもあるのか」と驚き入りました。女性の心の襞は、いくつになっても掴みかねます。ともあれ、思金神の作戦は大成功。天照大御神が引き出された結果、

『高天原及葦原中國、自得照明』

高天原も葦原中つ國も自ずと明るく照り輝くこととなりました。

ありがたいことに、天照大御神はたいへん心の広い神様で、「私をよくもだましたわね」などとおっしゃらずに、天の岩屋戸からお出ましになってから、今日までずっと明るく照り輝いて下さっております。

７．速須佐之男命の放逐

天照大御神が天の岩屋戸からご帰還されたのはいいのだけれど、天の岩屋戸隠れの原因を作った速須佐之男命をどうするべきか。八百万の神々は相談し、速須佐之男命に対して、

『於是八百萬神共議而、於速須佐之男命、負千位置戸、亦切鬚及手足爪令拔而、神夜良比夜良比岐。』

① お詫びのしるしの品々を差し出すことを命じます。
② その品々が出された後、速須佐之男命の髭を切り、手足の爪を抜いてしまい、
③ その上で、速須佐之男命を高天原から追い出してしまいます。

（続く）

天照大御神の素直さ、おおらかさは人間社会では「御人好し」と称せられます。昔のお年寄りは「人から騙される人間になっても、人を騙す人間になるな」と言うような教訓というべきか、慰めみたいなことをおっしゃった。筆者としては、この教訓を日常生活では拳拳服膺したい方です。しかし、国際政治の世界、国際経済の世界では、この所謂「御人好し」だけではやっていけないように思います。国際政治、国際経済の現場、さらには地震、台風などによる自然災害発生時や疫病の蔓延などという危機的な状況では、天照大御神を天の岩屋戸から引き出す知恵を発揮した思金神に見習うべきではないか、と考えます。